

---

# 俺の天敵

梓川ルリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の天敵

### 【Zコード】

Z08651

### 【作者名】

梓川ルリ

### 【あらすじ】

俺はバスケバカが集まるバスケ部に所属している。そんな俺には天敵がある。それのせいで俺は、バスケの実力を発揮できないのだ。そんな俺は知らないうちに天敵の秘密に迫っていく！

まず始めに断わっておぐが、メイド服について深く論ずる気はない。俺は健全な中二であつて、オタクではないのだ。

確かにメイド服は可愛いものだと思う。だが、オタクを見ているとそれほど執着しなくてもいいだろうと思つ。

これは俺だけだろうか？ 俺だけではないと信じたい。

「それじゃあ……最後にミニゲームをしようか

そういえば、今は部活の時間だった。部活終了時刻まで後三十分と少し。

中二の先輩方が引退して一週間たつていない。新バスケ部部長は、部長といつプレッシャーと戸惑いでどこか頼りない。そのせいなんか、この数日、部員たちにまとまりはない。

「部長が困つてゐるわ。さつさと始めようぜ」

一年の一人が部長に変わり、部員たちをまとめ始める。頼りない部長よりもよっぽど部長に向いている一年の声がきつかけなのだろう。あつといつ間にミニゲームが始まる。

実を言つと俺はミニゲームをやりたくなかった。なんてつたつて今日は、第一体育館での練習なんだから。

俺の通つている学校には、体育館が二つある。第一体育館は第二体育館よりも古い。別に、古いからミニゲームをやりたくないって訳じやない。それは当然だ。

理由は別にある。その理由は、言えない。言つたといひで笑われて終わりだらう。

「あーあ……。やりたくねえな」

そんな俺の気持なんか、完全無視。部活の神様は俺に微笑まない。

バスケバカが約九割所属しているのだ。俺そっちのけで思い切りゲームは盛り上がってる。まあ、俺は誰にも自分の気持ちを言つてない。言つたらおそらく半殺しにされるだろう。少なくとも、一発は殴られる。

「川村！」

突如、誰かが俺の名前を叫ぶ。声のほうに体を向けると、敵に囲まれている味方。距離があつて誰かは分からない。

俺に向かって、ボールがバスされる。どうやら部活の神様は、俺に試練を与えるみたいだ。

ああ、最悪。

ドリブルしながら、ゴールに向かつて進む。こんな時、俺は何も考えてない。ゲームをやりたくないなんて思考は、明後日のほうに飛んで行つてる。

でも、部活の神様は残酷だ。それを俺は一番よく知つてゐる。

「川村！　バス！」

俺の周りに敵が集まつて來てる。そんな様子を見かねたのか、味方の一人がこつちに合図を送る。冷静に考え、バスをしたほうがいいという結果に落ち着く。ここまで、良かつた。でも部活の神様はいつものように残酷だった。

ああ、終わつたな俺……。

言つておくが、俺は車について論じるつもりはない。いや、でも論じてしまふかもしれない。断わつておくが、論じてしまふ場合も仕方なく論じるのであり、本心から論じたいとは思つていない。

俺がいるこの空間はもう、第一体育館ではない。他の部員たちの声も、姿もまるで消えてしまつたかのようになつた。

車になつていた。今現在、俺は人間じゃなくて車だ。それも、結構高級な。

車になつているといつても自分の姿を見て判断したわけではない。感覚的に自分が車になつていると感じてしまつのだ。不思議な話だが。

現実ではありえない設定。第一体育館で「一一一」ゲームをするたびに

起こる現象。

「危ねえ！」

俺は目の前にある物と現在、凄まじいスピードで走つてゐる自分

自身とを理解し、叫ぶ。いや、正確には叫ぼうとした。つまりは、叫べなかつたわけだ。何せ、車だから当然とは言える。残念ながら車に口はない。

いつもと同じ展開。いつもと同じ気持ち。

自分が走る進行方向の先には何かがある。それが人物であるということは車になつても分かる。車になつても人間としての感情や思考は失われないらしい。

さらに、人物に近づく。人物の姿を俺は認識する。毎度毎度のことだが、俺は人物の姿に驚く。

メイド服だつた。白を基調にした、ひらひらレースがいっぱいいたメイド服。胸元にはどでかい、真っ赤なリボン。

それはただ、放置されているのではない。少女が着ている。

小学校中学年くらいの少女。少女の涙に濡れた瞳が俺を射抜く。車に心があるかどうかは分からぬ。おそらくないと思うが。だから、この感情は俺のものなのだろう。常人としておそらく正しいであろう感情が、俺を取り巻く。

少女をひきたくない。

だが、現実はそんなに甘くない。いや、この他者から見ればかなり異常なこの状態は現実ではないのか？

とりあえずその問題は置いておく。

どんなに頑張ってもスピードは落ちない。というか、スピードを緩めたり、ブレーキを踏むという権限は俺にはないらしい。この世が平等ってのはきっと嘘だ。いや、絶対。

訳分からぬことを考え始める俺。見て見ぬ振りしようかと考えだしたが、それを俺はすぐさま否定。

「止まれよっ！」て言うかお前もこっちに気付け！

意味ないと分かっていながらも口に出さずにはいられない俺の気持ち。空しい。何もできない。

毎度毎度の気持ちに飽き飽きしたいが、出来ない。それよりも俺は、少女をひかないようにするために必死だつた。

止まらないなら、進行方向を変えればいい。いつもと同じ考え方。いつもと同じように行動してしまう自分。

「絶対ひかねえぞ！」

自分の気持ちを高めるように、声にならない声を口に出す。

俺はハンドルを切つたつもりだ。もしかしたら、スピードを緩められないのと同じように進行方向を変えるという権限は俺にないかもしぬれないが。

進行方向が変わる。明後日の方向にスピードを多少緩め進む俺。視線の端に少女の姿が一瞬映る。本当に短い間だけだが。

ほつとした瞬間、俺は現実にほとんど強引に引き戻される。そして俺はいつも通りの展開に頭を抱えることになる。

ゲームは俺が車になつている間も進行している。それはいつもそうだ。

俺も当たり前のようゴーデリブルをして、ゴールにまつじぐらだ。

「やつたな！」

俺の進行方向の「ゴールではなく、背後の「ゴール」のほうで声がする。思い切り弾んだ声。

振り返ることは出来ない。味方の視線が俺に突き刺さっているから。

いつも通りの展開だ。メイド服の少女を何とかひかずに済み、現実に引き戻される。

俺の手にはボールはなく、敵が点を取つている。  
今日も結果は変わらない。

どうして忘れてたんだ、俺？ 確かに少女をひかなかつたのは胸を張つて威張れる事実だと思う。でもおそらくだが少女は生きた人間じゃない。幽霊とかそういう類の存在だと俺は思つてはいる。幽霊は車にぶつかつても痛くないよな？

「あー……最悪」

回想していた俺はもうミリミリゲームが終わっていることを思い出す。

今日の俺の気分は最悪。助けなきや良かつたつて思えない自分も最悪。

世界を怨み始めていた俺の肩を叩いた奴がいる。

「どうした？ みんな帰つちまつたぞ、悟」

全くこじつけの気持ちに気付いていない俺の親友。デリカシーが少しないのが玉に傷だ。

古典的なスポーツ少年で、勉強は一切できない。補習の常習犯だ。

「……」

「悟、どうした？ そんなに俺に負けたのがショックだつたのか？」

こいつは俺の気持ちを一生理解出来ないだろつな……。それを疎ましく思いながら、同時にうらやましくもある。

俺にはないものをこいつは持つてゐる。確かに成績だけを見れば俺のが断然上だし、運動神経だつてそんなに変わらない。

よく分からぬ。かなり強引で熱血漢で、社会に出たら間違いく上司ともめ事を起こすであろう親友をつりやまじく思つのはなぜなのか。

「そんなことない」

放つておいてもよかつたが、それも嫌だから適当に返事を返して

おいた。この時点でかなり間が空いていたが。

「でもって何を勘違いしたのか。こいつは偉そうに俺の肩をそつきよりも激しく叩く。

「そんなことあるだろ？ 今週は俺の勝ち

「ああ、そうだな。翼、お前の勝ちだ」

正直言つて俺はこいつとの勝ち負けに興味はない。第一、そっちからミニゲームの得点で勝負したいと言つてきたのであって俺は何も言つてない。それどころか勝負してもいいとも言つてない。

「だろ？ すげーだろ？」

現在思い切り天狗になつてゐる翼。胸をそらし、褒めてオーラを出している。

見てるこいつの頭が痛くなる光景だ。

「なんこと言つてないでさつさと帰ろうぜ」

翼への怒りとあきれをメイド服とついでに車にも押しつける。

お前ら幽霊だろ？ 俺をからかつて楽しいのか？ ふざけんな！

## 第一話（前書き）

第一話は川村悟君田線ではありません。  
佐々壁葵ちゃんという女の子田線です。

そのメイド服はすぐ可愛いの。これでもかつて位フリルがたくさんついて。でも全然うつとうしいとは思えないの。胸のところには大きな赤いリボン。

遠くに行っちゃつてもう何年も会つてない真里亜ちゃんが着たらすく似合いそう。それ位、可愛い。

「一年、集まつてー！」

「はい！」

部活中だつた。それを今になつて思い出し、回想を中断させ、慌てて部長に駆け寄る。三年の先輩が引退した今、部長も変わつた。前から次の部長になるんじやないかつて噂だつた先輩。

ちなみにわたしが所属してるのは女子バスケ部。お隣のステージ側のコートでは男子バスケ部が練習している。比較的まとまつての女子と違つて男子はざわついてる。きっと部長が変わつて少ししか経つてないことが関わつてると思つ。

「ゲームするよ。チームで別れて」

部長の言葉を合図に全員が二つに分かれる。

ゲーム開始と同時にわたしは駆け出す。ゲームは楽しい。それは勝つても負けても、得点を入れられても変わらない。

「葵！」

わたしにパスが回つてくる。心の中で嬉しく思いながら、駆ける。それと同時に、数人がわたしの周りに集まつてくる。

どうしようか……。一瞬迷い、パス。

が、失敗だつた。一応味方にボールは渡つたもののその後わずか数分でコートの外にボールが出てしまつ。

ゲームは一時中断し、女子の視線が男子のゲームに注がれる。か

なり白熱した戦いになつていて、見ているこつちが熱くなる。部長まで見入っているからか、誰もそれをとがめない。

「あ……」

小さく声を漏らす。わたしがひそかに憧れている川村先輩にボールがバスされた。鮮やかなドリブルで敵を抜いていく川村先輩。

「頑張れ……」

「また失敗するんじゃないの、川村君」

手を組み、つぶやいたわたしの声と、部長の声が重なる。思わず視線をそちらに向けるといくつか同意を示す声が上がる。

「かもね。彼よく失敗するし」

自分のことのように悲しくなつてきた。遠慮がちに咳き続ける部員たち。その中の約六割が川村先輩に関すること。

川村先輩のスピードが急に上がる。わたし以外の部員たちはざわめきだす。けど、その声がどこか遠くに感じる。いつものあれね。わたしはすぐさま現状況を理解する。

田の前には可愛いメイド服が、否、メイド服を着た少女がうずくまつている。

初めてこの状態を見た時は、驚いた。普通に驚くだろう。何せ今まで体育館にいたはずなのにいつの間にかどこだか分からぬ場所にいるのだ。いや、居るというより見えていると言つてもいい。

「危ないよ。車が来ちゃう……」

メイド服を着た少女はわたしの声を聞いても顔を上げない。もしかしたら声が届いていないのかも知れない。

「」の後の展開は毎回同じ。いつも、いつも……。

「あ……」

明らかにスピード違反であろうスピードでこちらに突っ込んでくる車がある。その車はわたしから見ても高級だつてことが分かる真っ白な車。種類は……分からぬ。車に関してわたしは興味がないから、種類が分からぬのは当然とも言える。

猛スピードでわたしの前を突っ走つて行く。早すぎて今回も車の運転手が分からぬ。

無意味だと分かりながらも、注意するよつに声をお腹から出す。お腹から出すと大きな声が出ると、部活中に知つたから。

「危ないですよー」

田の前に繰り広げられる光景はいつもと変わらない。だからわたしにはこの後の展開も大体分かる。

車がメイド服の少女に当たる直前、方向を変えた。それはほとんど無理やりで、車は明後日の方向に走り出す。

ほつとしたのもつかの間。わたしは今までに感じたことのない感覚に襲われた。メイド服の少女に対する違和感。もしかしてあの少女は、幽霊？

自分の思考を疑う。そんなバカなことがあるわけない。第一、わ

たしには靈感とかはない。

「あれ……川村先輩？」

自分の目を疑う。方向を変えた車が蜃氣樓のよつこコラコラ揺れている。それはすぐに消えてしまいそうな印象をこちらに与える。そんな車と重なるように、川村先輩の姿が見える。もしかして川村先輩は、車の幽靈にとりつかれてる……？

いつものように一瞬にしてわたしの目の前の光景は消え去った。今まで聞こえなかつた部員たちの声が近くから、はつきり聞こえる。

「あーあ。やつぱり川村君失敗しちやつた」

「高遠先輩、カツコいい！」

ちょうど高遠先輩がシユートを決めているところだつた。鮮やかなシユートが決まる。

それと同時に歓声があちこちから上がる。

川村先輩は何とも言えない表情で立ち尽くしているだけだつた。

「葵、一緒に帰ろう?」

「あ……うん」

部活が終わって十分少々。片づけに手間取っていて、友達を待たせてしまった。申し訳なくて慌てて、机の横にかけられていた学生鞄をひつたくるように手にする。

そんな葵を友達は優しく見つめる。雰囲気がビビリなく真里亞ちゃんに似てる。

ちよっぴり悲しくなってきた。そんな気持ちを振り払うようにわたしは声を弾ませる。それは少しわざとらしかったかもしれない。

「待たせちゃってごめんね。行こうっ。」

そんなわたしに向も突っ込まずに友達はわたしの手をひく。

「気を使わせちゃったな……。かなり反省。」

優里には何も話してない。というか、親しい人には誰にも言つてないことだけ。優里は薄々気づいてる気がする。わたしが、隠し事をしてるってこと……。

話す必要はないもん。過去のことだし……。自分が逃げていることを自覚し、嫌になる。隠す必要がどこにあるの? 分からない。自分の気持ちが……。

「そうだ、葵」

わたしが回想している間、無言だった優里が不意に思い出したように声をあげた。どうしたのかとマイナス思考になつていていた思考を打ち切り、優里を見上げる。

「どうかした?」

「ほら、葵が前わたしに聞いたでしょ? 『この学校の七不思議』

それで思い出した。こいつかは忘れたけど、そんなに最近じゃない

と思ひ。何となくその時は会話がなくて、そんな話をした気がする。わたしが頭の隅っこから記憶を引っ張り出す。

「この学校に七不思議ってあるのかな?」

そんなわたしの呟き、隣を歩いていた優里はぴたりと立ち止まる。

怪訝そうにこちらを見てから、何かを考えるよつと、あるいは思い出そうとするかのように下を向く。わたしは何となくその時の雰囲気で優里の立ち止まつた少し先で足を止める。

「あると思ひけど……いつの間に七不思議に興味を持ったの?」  
優里の疑問ももつともだ。わたしは周りがからかうネタにするほど怖がりだ。もちろん、怖い話の類も苦手。それは七不思議や都市伝説も例外ではない。

「うん、ちょっと……」

絶対にじまかしになつてない言葉を言い、それから笑みを作る。わたしがこの学校の七不思議に興味を持った理由はただ一つ。自分で勝手に幽霊だと決めつけたメイド服の少女だ。否、そのメイド服だ。真里亞ちゃんに似合ひそうなメイド服の少女は学校の七不思議の一つなのではないかと考えたためだった。

わたしはちょっとピリドキドキしながら優里を期待して見つめる。そんなわたしを見つめて恥ずかしそうにはにかんだ後、優里は口を開く。

「当たり前だけあつたわ。七不思議」

そこまでは予想済み。どこの学校にも七不思議はあるって何故かわたしは決めつけているから。

わたしが先を促すより早く、優里は念を押してくる。かなりわたしを心配している顔をしながら。

「七不思議聞いて怖がらないよね？ 何かの罰ゲームとかなりやらないでもいいのよ？」

かなり申し訳なくなってきた。そしてそれと同時に自分は好い友達を持ったなって思う。本当はメイド服の少女が気になるだけだから怖い。でもそんな気持ちを優里に語らせまいとわたしは必死に声を弾ませ、笑顔を見せる。

「平気よ。わたしだつてもう中学生よ？」

小さく優里は噴き出す。それからゆっくり、思い出しながら語りだす。

「他の学校の七不思議と似たものばかりだつたわ。たとえば……」

それからしばらく考えるよう間に空けた。どうしたのだろうと思いつつ思い当たる。もしかしたら優里はわたしを怖がらせない話をしようと思つてゐるのではないか？

「人体模型が歩いたりとか……ピアノが勝手に鳴つたりとか……」

二つの情景を想像してみる。怖うだけど、平気。わたしは夜の学校に行つたりしない。それだけは断言できる。たとえ宿題が出来なくて先生に怒られることになると分かつても、わたしは夜の学校

にだけは行かない。だつて夜の学校つて不気味でしょ？

「メイド服の少女の七不思議つてないの？」

五つ目くらいに差し掛かったところでわたしはじれつたくなつて、聞いていた。優里は目をぱちくりさせて、心底心配そうな顔になる。「なあにけど……」

きつとメイド服の少女と七不思議が結びつかないんだと思う。それが当然だと思う反面、わたしは少しがつかりした。

「どこからメイド服の女の子が出てくるの？」

七不思議つて大ウソだとわたしは勝手に決め付け、夜の学校なんて怖くないと認識を改めた。

優里の言葉にはあいまいな笑顔を浮かべるだけで、ごまかす。

「何となく……かな？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0865i/>

---

俺の天敵

2010年10月15日21時03分発行